

おがわ町九条の会総会のご案内

おがわ町九条の会2011年度総会を下記により開催いたします。万障お繰り合わせの上、ご出席ください。

日時:2011年9月19日(月 敬老の日)午後 2 時

会場:小川町図書館視聴覚ホール

議事:2010 年度活動報告 会計報告 監査報告

2011 年度活動計画 予算 その他

記念講演

「3.11 から見えてきたもの ~私たちの暮らしは

講師 桜井 薫さん(本会会員)

どうかわるのか~」



自然エネルギー事業協同組合レクスタ代表理事 エルガ、ソーラーネット代表

「40 年前、福島第一原発の、真新しい建家を、一学生として見学したことを覚えています。多分まだ燃料棒を装着する前だったか、その直後だったか……明るく、金ぴかの金属の内部、広いコントロールルーム…子供の頃見た「タイムトンネル」の映像のような、未来の曲線の世界でした。でも、私が、原発からドロップアウトしたのは、この見学会の夜のベットの中でした。土のおいが全くない、人間のおいのしない金属の固まりに、多分、拒否反応を起こしたのだと思います。まさか、その時に放射能が漏れだしていたわけではなかったでしょうか…」(エルガのブログから)以後桜井さんは「町の自然エネルギー屋さん」として、太陽光発電のパネルを持って、世界中を飛び回っています。震災後いち早く被災地支援に乗りだし、「太陽光発電で被災地に電気を灯し、バイオマスと太陽熱温水で暖かいお湯を提供することから、自然エネルギーを利用した被災地支援プロジェクトを発足させることとしました。被災地への連帯と支援の思いを太陽光の電気というかたちでつなぐ「つながり」、そして私たちの熱い思いをバイオマスや太陽熱というかたちで支援する「ぬくもり」を続けて、「つながり・ぬくもりプロジェクト」と命名しました。」とブログで語っています。今回、お忙しい中、3.11 後のご活躍の様子など通じて、「町の自然エネルギー屋さん」としてのメッセージをお届けいたします。〈参照URL〉 <http://www.erga.jp/> <http://www.rexta.or.jp/>

記録映画 上映会のお知らせ

初めて明かされる二重被爆の真実

二重被爆～語り部 山口 彊の遺言

日時:2011年8月13日(土)12時40分～1時50分まで

場所:小川町図書館

参加費:500円 (DVD借用費)

* 続いて2時より、連続学習会
「今こそちゃんと知りたい原子力発電」の
第3回目「六ヶ所村核燃サイクル施設」を
実施します。こちらにもぜひご参加ください。

主催:「原発のない未来の会」

お問い合わせ:090-6125-3479(長尾)



1945年8月6日広島、8月9日長崎。わずか75時間、直線距離にして300キロしか離れていない2つの都市に投下された原子爆弾。無辜の市民合わせて20万人余が一瞬のうちに亡くなり、今も原爆症に悩む人々が30万人もいる現実。記録映画「二重被爆」(2006年3月完成)から5年。広島と長崎の両市で被爆した「二重被爆者」だった山口 彊(つとむ)さんを追いつけた軌跡が映画となった。「二重被爆～語り部山口 彊の遺言」は、被爆後60年余り、歴史に埋もれていた「二重被爆」の実態が明らかになり、日本国内、海外への反核の思い伝え続けた山口 彊さん。93歳で命を召されるまで、その遺言の意味を描いた。

「原発のない未来の会」
からご案内を頂きました。

お待たせしました。今年も 第6回おがわ町民コンサートが開かれます。

日時:2011年12月10日(土)午後

会場:パトリアおがわ

出演者:大塚幸穂(チェロ) 大塚秀子(ソプラノ)

会田桂子(バイオリン) 島田重雄(三味線・民謡) 他

(詳しくは次号、お楽しみに!!)

リレーメッセージ



被曝者として、原発事故を告発し、脱原発の道を求める

輪湖昇(角山)

○今回の事故で、原発はコントロールできず、長期間あらびまわる危険な怪獣であることが証明された

- ・多くの人が故郷を追われ、生活が破壊された。健康不安にさらされている。私たちも(数値の高低はあっても)地域の自然とともに被曝した。
- ・土、水、食糧、自然や他生物への影響は未知数で「わからない不安」が続く。
- ・事故原発でも(放射能に抗して働く人々の努力にもかかわらず)冷却水も定まらず、5ヶ月たった今も炉内の核燃料の状況把握すら出来ない危険が続く。
- ・一定の安心レベルといわれる核燃料の取り出しは早くも10年後と長期戦だ。

○怪獣は化石化し、脱原発の道を進もう

- ・原水爆の被害国として世界にその禁止を発信してきたわが国自らが、加害者になった現実をきびしく受け止めよう!
- ・幸い我が国の電力資源は豊富で多様に資源に即した多様な規模と地域で開発の道が可能である。国の方針決定を求めたい。
- ・まだ再開に向けて世論誘導をねらう勢力を告発し、「電力不足」「国際競争力の低下」など「安全神話」崇拝者に反省を求める。

○消費者もわれわれ農業者も食品などの安全検査体制の整備を求めている

- ・わが有機農業グループも自ら代表品目と土の検査を決めたが、ちよい機構関の多様な負担には不安を感じている。直売所などでの対応も求められる。
- ・早急に加害者である東電・国において万全な体制整備が求められる。
- ・3.11事故発生時の高濃度放射性物質の濃度、地域的広がりなどのデータの集積と公表、被害防止または低減対策の研究開発も求めたい。



九条田んぼの前の輪湖さん

新聞の「投稿」から 毎日新聞 2011/7/27

7月12日、この国の相対的貧困率が発表された。全体で16.0%と過去最悪、国民の6~7人に1人が貧困ということになる。驚くべきは母子家庭などの「一人親世帯」の貧困率が50.8%と依然半数以上であること。ちなみに今回の調査で「貧困」とされたのは、2009年の年間所得が112万円未満の人たち。

「貧困」という言葉を、この国は長いこと忘れていた。その証拠に、貧困率そのものの調査を政府は1960年代にやめてしまった。そんな貧困が2000年代なかば、「格差社会」や「ワーキングプア」といった言葉、「年越し派遣村」という現象とともによみがえってはや数年。政権交代を経て貧困率も公表されるようになった。しかし、雇用をはじめとしてこの問題の解決は進んでいない。そこに起きた東日本大震災。ただでさえ満身創痍だった日本がさらに痛めつけられた。

11年版の労働経済白書によると70年代後半生まれのポスト団塊ジュニア世代(現在30代)の正社員化は進まず、非正社員でい続けている割合が高いという。また、07年から09年にかけて、子ども(17歳以下)の貧困率が1.5%増えているのも気になる。少子化で子どもの数は減っているにもかかわらず、この24年間に4.8%も悪化しているのだ。この背景には、働き盛りの親世代の低所得化、不安定化が浮かび上がる。

自殺者は13年連続で3万人を越え続け、孤独死も年間3万人と言われてる。雇用破壊、無縁社会、そして子どもの将来を左右する貧困。どこから手をつけていいのかもわからないが、実態をくわしく知ることからしか解決策は見つからない。

〈雨宮処凛: あまみや・かりん 作家。1975年生まれ。反貧困ネットワーク副代表なども務める。〉

異論
交論

解決へ、まずは実態知ろう

国民の6~7人に1人が「貧困」です

雨宮処凛さん



ご案内

第一回平和コンサートin東松山

2011年9月25日(日)13時30分開場

高坂丘陵活動センター

主催:東松山九条の会

問い合わせ:090-5408-2930<馬橋>

